

20年余のこの行事を省りみれば、労多く功少なしの感なしと見る向きもあるが、然しそれは、皮相な見方であって、先ず対外的に歯科医の存在（価値としての）を高め我々の意図が正しく認識せられ従って、人格的に歯科医師が高く評価されていると信ずる。

さらに対内的にも一層効果的と思われる。

第一に、会員同志の親和とそれに伴う一種の言うに言われぬ空気が（雰囲気）ある事。

第二に、お互いに人格を認め合う事によって、人格的淘汰がなされること。少しでも、エゴイズムが公共協同事業によってためられる事である。

宇宙全体の運行には、協同の精神が存在すると言う、（それを信じない人々もあるが）人類の社会も協同社会であらねばならない。我一人では存在し得ない。

まして、同じ業をなし生活する我々にとって、このグループは実に得難い有機的協同体であろうと思うのである。

更に、学童に及ぼす内腔歯牙に関する心理的教育が必ず有るものと信じて疑わない。

ともにかくにも張り切ってやりましょう。

今年も大いに K

出稿者がKとありますので、北野幸夫先生かと思われますが、この文章を読むと父の姿と重なるような気がしてなりません。働くことが趣味の父、歯科医師会以外の事で出掛けることは殆どありませんでした。冠婚葬祭を始め、税金攻勢の激しかった時代の税務署との折衝に至るまで代行させられましたが、学校口腔検診の日だけは別格で楽しそうに出掛けその日を心待ちにしていたようです。唯一の趣味だったのかもしれませんが。話の好きな父でしたが、子供達との対話は余りなく、話はもっぱら患者さんの方に向いていたようでよく知っている人達から「治療椅子で口をあけているのに話しかけられて困る」といわれ、父にその旨伝えたのですが一向に直そうとはしなかったように思います。

保険制度の充実した現在では、到底考えられませんが、保険制度に対しては否定的で最

後まで保険医の指定を受けぬ頑固者、奇人であったかもしれません。税金折衝の際、税務署員から「保険をしていないのは、北海道に2人しかいませんよ、もう一人は、函館の在の方にいる」と言っていました。が今になって何となく父の生き方がわかるような気がします。

50年誌を発刊するにあたり、雨田先生から父の経歴等について、聞かれましたが残念乍ら父からは何も聞いたことがありませんし、小学3年生で母を亡くしており、母からも聞いていませんので、お答えすることが出来ませんでした。札幌の姉に問い合わせしましたところ次のことがわかり、存命中にいろいろ聞いておくべきだったと、悔やんでおります。父は大正7年、美唄三菱鉱業所病院に勤めていた兄（桜田勇喜昭和9年没）を頼って生まれ故郷の秋田県より来美、助手として病院に勤務。大正7年に母（酒井初代）と結婚、大正10年上芦別三菱鉱業所病院に移り大正14年まで勤め、大正15年母の生まれ故郷の美唄の記念通り（現在西1条南1丁目3-6）で開業したと教えてくれました。

ちなみに、私より上、3人の兄弟の出生地は上芦別三菱炭鉱社宅となっております。

何も語らなかった父の人生を考えてみると、父は若い時からいろいろ苦労を重ね、さてこれからいよいよ順風満帆の軌道にのる筈だった昭和12年2月上が女学生、一番下の妹が1才の幼い7人の子供を残し母（41才）に他界され、人生に狂いが生じたと思います。

嫁いでいた長女に昭和23年6月28才の若さで他界され、更に昭和29年頼みにしていた後継者の長男（33才）にも先立たれ、どんなに辛く残念だったことでしょうか。

しかし、父は愚痴一つこぼすことなく仕事一筋に打ち込み晩年になって、アルコールの量が増えたのも無理からぬ事と思っております。亡くなった父の年齢をオーバーし父の苦悩を痛切に感ずる今日この頃です。

開業当時の想い出

小 森 英 世

「まず隄より始めよ」で、旗振り役が何も書かない訳には、いけないという事で、開業当時の事など振り返ってみる。

昭和54年、初めて美唄を訪れたのは、雨田先生が道歯会通信に絶えて若い歯科医の開業していない町との記載があったのに端を発している。当時、前年より、旭川でピンチヒッターとして開業しており、そこは、又、名立たる諸先生の密集している激戦の地で、将来の歯科界の厳しさを予見させる場所であった事と関係している。

札幌、薄野にある中央寺の裏手に生まれた事から、中央区以外は、札幌の何区といえども、たんに札幌の郊外にすぎないと思えず、美唄も郊外といえれば郊外に変わらない、丁度良い立地にある、と考えた。翌55年開業の運びとなったが、テナントのオーナーである藤井社長（現会長）が太っ腹の方の為、ずいぶんスムーズに事が運んだ事も幸運であり、今更にして感謝申し上げる次第です。

美唄の歯科の事情には、全く疎く、まさか、4～5年は、後続の新規開業などないと思っていたが、翌年、大坪先生が開業されたので驚いたことを記憶する。いかに、リサーチ不足で無鉄砲に人生を決めているかが推し量れる。実際は、患者混雑の緩和の為、患者はもとより自分にとっても大助かりであったのだが。開業のあいさつの際に、現会長の宝崎錠二先生には「当地の歯科事情は、社会問題の一步手前であるので、宜しく頑張ろう」と激励されたのを思い出す。実際、患者の混み方は異様な程で、長い事、カルテがずらっと並び、途方にくれ、うなされる夢をみる日が続いた。あまり患者が多すぎるのも困ると、2Fのテナント開業にしたのだが、当時60才の方も、今では80才近くになる訳で、元気に生きておられても、階段の昇り降りに困難をきたし、その御不便に申し訳なく思う今日此の頃である。

潜在的には、札幌、旭川間の往来時に、汽

車の窓から、美唄・奈井江間の景色、即ちピンネシリ の 勇 姿 に、又、あたりの牧歌的な風景に心ひかれるものがあつたのかもしれない。

時代は移り、美唄にも当地出身の優秀な方々が数多く、その地域医療を任うに至っているが、歯科界の激戦なのは、ひとり美唄にのみとどまらず、日本全国の話であり、先進各国共通の現象なのは周知の事なので、一層の精進が求められていると解釈している。

夕張等の産炭地の盛衰や大正レトロを求めて、満洲等にも、興味を持っており、旧東明鉄道のサイクリングロードや我路の街を散歩しながら、時代にはんろうされる街の行方を、感慨を持って眺めてきた。今回、記念誌編集にかかわるなかで、急膨脹した人口に伴なう、学童の検診等、公衆衛生事業を限られた開業人数でこなしてこられた事に象徴されるように美歯会先輩諸先生の忍耐強い活動を知るにつけ、感心させられる事、しきりであった。入会以来、終始一貫和やかな会の雰囲気は、まさに伝統ともなり誇りとも思えるものである。先達の色々の手記にも、それに触れた記述が数多く見うけられ、皆さんが、それを大事にされてきたという事がよくわかる。

尊敬と感謝申し上げる次第である。

美唄の歯科界に知己多し

大 坪 義 和

昭和51年に愛知学院大学歯科部を卒業後、5年間母校の口腔病理の大学院での研究生活を経て、昭和56年に美唄に帰って開業しました。美唄は私にとって生まれ育った町で、すべてに愛着があり、この地で開業して本当によかったと思っています。ここで私と美唄の歯科の先生との係わりについて思い出すままに書いてみたいと思います。私は子供の頃、歯に関心がなく、当時としては御多分にもれず学校歯科健診のある時だけ歯を磨く生徒でした。その為子供の頃から歯科医院通いをしていました。幼稚園から小学校低学年の時だと思いますが、母親につれられて桜田巳年二先生に診てもらったのが最初だと思います。中

学校時代には雨田先生に不良患者とおこられ(仮封セメントがとれた時だけ診てもらっていたのでなかなか治療がすすまない)、高校時代は、高橋常美先生が御父上と一緒に黙々と診療している姿が思い出されます。

高校卒業後、扇谷一貫先生には先生の母校を受験した際、大変お骨折りを頂き、また受験滞在中は一貫先生の兄上重憲先生宅に泊めてもらい、大学在学中の次男泰典先生(現在当別で開業)にもお世話をして頂きましたが、期待に答えられず大変申し訳なく思っております。大学時代は美唄に帰ると扇谷明典先生の治療室を見学させてもらったり、智歯の抜歯や大臼歯の治療をして頂くなど多くの先生方に面識を頂きました。私の母の総義歯は宝崎幸子先生に入れてもらい、なくなるまで大切に使用させて頂きました。生前、母は、よい入歯だと大変喜んでおり、歯科医として私が出る幕はありませんでした。十数年前から月1回の勉強会では宝崎錠二先生、小森先生とは歯科全般にわたって多に互いの意見を交換しあっております。早いもので私も今年で開業して17年目に入りました。これまで、先輩先生方にご指導して頂き、なんとか無事にやってこれました。これからも微力ではありますが、美唄の歯科医療の一端でも担えればと思っている次第です。

美唄での開業をふりかえって

孫 泰 一

美唄歯科医師会の50周年にあたり私自身の開業から現在に至る経緯を報告してみたいと思います。

私は昭和60年2月に現在の場所で開業しました。

それまでは東京の立川市で分院の医院長をしていて、そのまま東京で開業の予定をしていました。

父が体調をこわして入退院を繰り返し、美唄へ帰ってくることを切望した為に、その要望に折れる形で故郷へ帰り、開業することとなりました。

そして、そのまま美唄歯科医師会へ入会させて頂きました。

3年後に父が亡くなり、家業は母と弟達が継いだので、私はそのまま現在の歯科医院を開業しています。

開業当初は他の先生と同じように地方特有の患者さんの口腔内の状態に驚きました。

患者の口腔内の状態の悪さ、特にブラッシングに関しての啓蒙に追われ、毎日全てのチェアでTBIをそれも同じ患者に何回も行うような状態が続きました。

また、患者さんが“おまかせします”のひと言でこちらの説明に耳を傾けてくれないことやアポイント制度への理解を求めること、急患来院患者さんの数の多さにも戸惑いました。

その後は他の各地とたがわず人口の減少と若い歯科医師の開業で美唄の患者さんも変わっていき、時に子供たちの口腔内の変化が著しいと感じます。

今では都市圏と全ての内容で変わらなくなってきていると思います。

特に、ここ2～3年は歯列矯正とインプラントを行う患者さんが増えたのは、口腔内の重要性の認識が高まった現われではないでしょうか。

これらの変化は私達歯科医師の力によるものと言うよりは、新聞・週刊誌などのマスメディア特にテレビなどのコマーシャルの影響によるものではないでしょうか。

当医院は今年の3月に内装を一新して、機械、器具、チェア類も全て変え、特に診療へのコンピューターの導入を積極的に考えた診療形態へと変化をさせました。

レントゲンフィルムをなくして、患者さんの被爆量を減らし、現像の待ち時間を減らす為にデジタルX-RAYを導入しました。

メインとなるコンピューターをレントゲン室のすぐ外におき、各チェアにパソコンを設置しそれぞれをLANで結んでいます。

院長室にもLANでつながっているパソコンがあるので患者さんのレントゲン画像をその患者さんの前でも、また院長室でも他の先

生と診断をすることが出来ます。

各チェアーに設置したパソコンで患者さんへのインフォームドコンセントにデジタルカメラも使用しています。

デジタルカメラは写してすぐにフロッピーディスクにスマートメディアを写し変えることでその場でパソコンのモニターに写し出す事が出来ます。

今まで患者さんに対して行っていたTBIやルーティンな説明を無料でプリンターについてきた画像閲覧ソフトにまとめて説明にも活用しています。

今までのパノラマ写真や口頭の説明だけでなく、パソコン上のイラストや画像を見せながらの説明で患者さんの理解を深めていると思います。

またパソコンのスクリーンセ이버も子供の喜ばれるキャラクターものに変えています。親の診療を待っている子供たちの為に空いているチェアーパソコンにインストールしてあるゲームで遊ばせています。

私にとってパソコンという新たな媒体を通して患者さんや子供たちと接するのは診療室での働く環境を愉しいものへと変えてくれたような気がします。

出身は、美唄です

吉 村 治 範

大学生そして社会人になると、それまであまり関心がなかった自分の出身地について意識するようになりました。なぜなら自己紹介をするたびに、自分が北海道美唄市出身であることを報告するはめになるからです。美唄なんて小さな町のことを知る人はこの中にいないだろうと思いながら話をしていると、以外にも自分より年上の人ではかなりの人が美唄の存在を知ってくれていますし、なかには美唄に住んでいたことがある人も居たりします。美唄がかつて本当に日本を代表する産業都市であったことの証でしょう。

美唄出身で忘れられないエピソードがあります。岩手医大の入学試験の時、写真付きの

受験票と受験者を比較しながら見回りをしていった試験官が、私のところでおやっという感じで一瞬立ち止まりそのまま通り過ぎました。試験が終了し教室を出る時、その試験官に呼び止められて、カンニングでもばれたのかと思って心臓が飛び出そうになるくらい驚きました。試験官は、君は美唄出身の吉村君だね。僕も美唄出身だから頑張れなさい。と言って去っていきました。頑張れと言われてももう試験は終わったのに、いやまた来年頑張れという意味かもしれないと、すっかり不安になってしまいました。この後大学に何とか入学できて、その試験官が口腔解剖学講座の教授で美唄出身の名和橙黄雄先生であること。先生の姪が私の同級生であること。そして自分の所属した軟式庭球部の顧問であったことから公私共にお世話になりました。しかし解剖の試験は厳しかった。

大学を卒業し開業してからも、美唄出身は影響力を示しています。たとえば自分が最初に所属したスタディーグループに、札幌歯科医師会でご活躍の富田達洋先生が居られて、自分が美唄出身であると自己紹介をすると、先生のお父さまが美唄で歯科医師としてご活躍されていたため、幼少期を美唄で過ごしたことから、すぐ名前を覚えていただき、その後いろいろご指導をいただきました。最近では小森先生の北大の同期生である函館でご開業の菊田善夫先生とあるグループで一緒になり、先生のお父さまも美唄で歯科医師としてご活躍され、子供の頃過ごした美唄の自然が今でも忘れられないとなつかしく語られ、その後二人はすっかり意気投合してしまいました。

このように美唄出身は何等かの影響を私にもたらせてきました。これからは自分がいままで美唄出身で受けてきた恩恵のお返しとして、少しでも美唄市の地域医療のお役に立てることができればと考えています。

変動の10年

前 山 善 彦

私自身にとってこの10年は変動の時でした。平成元年に開業、平成4年に結婚、平成10年秋にはやっと父親になれそうです。

初め3年間はバブル全盛期でしたので、独身ということもあって、結構飲んでは午前様ということの多かったことが、今は懐かしく思い出されます。

平成4年頃より体調も悪かったためか、日射病でゴルフを途中でやめてクラブハウスに帰ったりしました。

また、結婚直後より体重が増え、人間ドックでも指摘され、ダイエットしたりしました。

夏になると体育館でバドミントンをしたりしていましたが、冬の頃にはやめてしまうという年が2年、3年と続くうち、夏のダイエットもおろそかになって現在に至っています。

何とか平成9年5月から犬を飼って散歩させたりして最低の運動を維持しています。

趣味もカラオケ、ゴルフなどがなくなり、家でできるもの（テレビゲーム）や犬の散歩などに変わってきました。

最近2、3年前から少子化、人口減少、医療費の値上げ等様々な要因により、患者数も減少し、収入もダウン（もともと低い）しています。

次の記念誌が出る頃まで、うちの名が残っているのが心配です。

最後に、この会のますますのご発展とこの会・会員皆様のご多幸をお祈りして終わりと致します。



沼貝開拓記念碑（昭和4年）